

# インターンシップ報告書

社団法人シャンティ国際ボランティア会 プノンペン事務所  
三成 里世（インターン）  
2006年8月21日～2006年9月15日

## 目次

- 1 はじめに
- 2 訪問先 NGO 及びインタビュー
  - Ministry of Education Youth and Sport (Moung Chantouch さん)
  - スラム訪問
  - KAPE 訪問
  - Ministry of Education Youth and Sport (EM HAMKHUON さん)
  - Ministry of Education Youth and Sport (加藤栄さん)
  - FIDR
  - Room to Read
  - Education for girl (scholarship program)
  - スナーダイ・クマエ孤児院
  - Room to Read in Siem reap
  - バンテミンチェイ 図書館活動教育
- 3 結果・考察
- 4 まとめ
- 5 参考文献

## 1 はじめに

現在、カンボジアには 8335 校の学校があり、77897 人が教員として教壇に立っている。<sup>1</sup>単純計算して一校につき 10 人。13,881,427 人の人口を抱え、その約 50%が 18 歳未満というこの国では、教員の数も質も十分ではない。それに加え、都市部、農村部、スラムでの教育格差は広がり、教育不平等により様々な弊害を生み出している。

教育の結果を見届けるには最低でも 5 年はかかる。今日行った教育が明日すぐに結果の出るものではない。しかし、教育は全ての原点である。人間は必ず幼少期、青年期を経るのであって、その中での教育、もしくは学校、教員の役割というものは、想像以上に大切なのではないだろうか。

教育の質の向上、教員の質の向上で国が変わると言っても過言ではない。

今回、SVA プノンペン事務所の協力を得て、カンボジアの教育状況把握、そして特に教員の地位、質の向上、都市と農村部の比較についてインタビューさせていただいた。突然の訪問にも関わらず、快くお答えいただき、あらゆる情報を惜しみなく与えてくださった方々に謝意を表したい。

## 2 訪問先 NGO 及びインタビュー

MoEYS (Moung Chantouch(ムーン・チャントウーイ)さんへのインタビュー)

ムーン・チャントウーイさんには主に、教員養成カリキュラムについてお話を伺った。ポルポト政権終結後、カンボジアでは教員の数が全く足りていなかったこともあり、小学校卒業程度、もしくは字が書ける、簡単な計算ができる程度の教員達が教壇に立つこともあった。それ以後、30 年の月日が経ち、現在カンボジアでは、

高等学校卒業 + 2 年の Teacher Training

大学卒業 + 2 年の Teacher Training

これら 2 つのカリキュラムが設けられている。 の教員免許においては、小学校の教員免許の資格を取得でき、 では中学校、もしくは高等学校の教員免許を取得することが出来る。ただし、カンボジアは州により、TTC が平等に配置されているわけではないので、以下のように、小学校教員免許を習得できる州と、中学校教員免許を習得できる州に分かれている。

【小学校教育免許取得可能な州】

---

<sup>1</sup> Education Statistics & Indicators 2004/2005 Ministry of education, Youth and Sport  
Pp 1

プノンペン・コンボンチュナム・ポーサム・バットンノム・バンテミンチェイ・シエムリアップ・コンポントム・ベリウィヒアー・グロッチェ・シテンドライン・コンブンチュン・プレイベイ・スパイリエン・コンダーン・タケオ・コンポール・ゴンブンスプー・セイハッスツウィル

【中学校教員免許習得可能な州】

バットンノム・プノンペン・コンダーン・プレイベイ・コンナンチャン・タケオ

現在に至っても、農村部へいくほど教員免許取得が難しい状態であり、特に中学校免許取得については、大学への進学が最低条件でもあるので、未だ都市部・農村部の格差は埋められていない。その他、公務員としての教員の給与が平均を下回っており、その所得格差拡大も否めない。給与が不十分であることにより、教員の男女比も平等ではない。特に農村部では、女性教員の数少なく、男性教員においても、すぐに都市部に帰ってしまったりする。このようなことからわかるように、様々な問題が渦巻いており、カリキュラムを改正し、質を高めようにも憚られることが多い。まずは、生徒の進学率を伸張させると共に、教員に対する正しい認識、都市部・農村部における格差の縮小を掲げていく必要があるのではないだろうか。

#### スラム訪問

スラム訪問では、カンボジアの明暗を改めて目にした。一方には国会議事堂、カジノ、そしてスラム。不自然な羅列ではあるけれども、これが現実であると感じた。どこのスラムに行っても出会うのが、兄弟・姉妹を抱っこしながらよく世話をしている子供たち。髪が茶色になっている子も多く、尋ねた年齢よりも幼く見える子供たちが多かった。一緒に仲良く手をつないで、時には抱っこしながら、スラムを見学させていただいたのだが、第一に、やはり経済的に自立した生活を個人で送ることが出来なければ、スラムの縮小はまずないだろうと思う。

彼らの多くは、強制移転で自分の意志とは別に、働ける場所のないところへ連れてこられているにも関わらず、十分な援助は受けられていない。働けなければ、衣食住が十分に満たされず、それ以上の生活のゆとりもないのでスラムを出ることができない。いわゆる悪循環である。そして第二に、教育の不十分さである。見学したスラムのうち、学校の整備されているところはわずか1つ。図書館設置についてもSVAによるものが1つであった。街のあちこちで見ることのできる、プライベートな塾に通い英語を学ぶ子供たちと、字の読み書きすら出来ないスラムの子供たち。この教育格差がカンボジアの生活格差を生み出していると言っても過言ではないだろう。"Education for all"の意味を改めて感じた経験であった。

#### KAPE

KAPE 訪問では、 **Girl's Education Scholarship program** **Child friendly school** **Teacher's workshop** についてのお話を伺った。

と の奨学金プログラムについては、小学校卒業で中学校への進学を諦めざるを得ない子供（特に女子）への経済的援助、高校進学への援助を行っている。その他、**Life skill courses** では、裁縫などの職業訓練の供給もある。現在のところ、供給する生徒数も増えており、教育支援の上ではますます需要は高まるようである。

の **Child friendly school** については、KAPE オリジナルの根本的な教育改革が掲げられている。未だに行われているであろう、教員の後について復唱するだけの一方的な授業だけでなく、いかに生徒参加型へ移行していくかということが主な内容である。例えば、机の羅列方法、教室の飾りつけ、授業の具体的な進め方などについてである。つまり学校全体の質の向上が重要であり、それにより教育の質も上がるのだと思う。これらの背景には、教員として長年働いてはいるものの、一体何をどうすれば教育の質が向上するのかという教員たちの声にも答えることが出来る。どのように質問を投げかけることで、何を意図し答えを導き出すのか。教育指導案やシラバス、マニュアル作りにも大変効果的である。

の **Teacher's workshop** においては、オープニングセレモニーではあったが、約 36 人の先生方のワークショップを見学させていただいた。主な内容としては、

8月30日 **Child right**

8月31日 **Taxonomy questions**

9月1日 **Critical thinking + Creative thinking**

9月2日 **Corporative leaning**

9月3日 **Classroom management**

9月4日 **Child friendly school**

9月5日 **Assessment for Children**

9月6日 **Effective Preparation**

であった。ほとんどが、高校卒業後 2 年のトレーニングを受け、教員をされている 30 代の先生方であった。ワークショップを行うことの利点としては、いつもは来られない農村部から来ることで他の先生の様子分かること。そして一斉に授業を何日間かするので、統一しやすいことも挙げられる。ソフトな面での支援が求められている今だからこそ、このような支援もあるのだと考えさせられた。

**MoEYS (EM HAMKHUON さんへのインタビュー)**

今回のインタビューでは、以下 3 つのことに焦点をあてお聞きすることができた。

不足している教員数とその概要

教員の都市・農村部における格差

教員の社会的地位について

まず初めに、 の教員数については、小・中・高ともにドンカウ・ルッセイケ地区（ブ

ノンペン郊外)が不足しているとのことであった。その理由としては、生活環境の違い、治安の対する不安(特に女性の教員)が多い。例えば、30-40分の通勤では、交通事故に遭いやすい、バイクを盗まれる可能性などを心配している。その他にもドケンチャンにおいては、10学級(500人)で教員5人という深刻な教員不足を指摘されていた。教員の質向上よりも先に、数量的な教員数の確保には、やはり非現実的な収入の改善、環境の整備、福利厚生の完備などが必要である。

の都市・農村部における教員の格差(共に高校卒業とTTC2年)においては、格差が拡大しているようである。ただ、どちらの出身者が好ましいというのではなく、都市部には都市部の、地方には地方の利点がある。例えば、プノンペンの教員においては、

- ・経済活動としての実務を経験している
- ・都市部ならではの知識を身につけている
- ・副業を営んでいる
- ・アンタック以降の教員については、インターネットを使いこなすことができる
- ・英語の話せる教員も出てきている

ということであった。反対に地方の教員については、

- ・中学・高校に通いながら、農業を営んでいる(教員との両立が可能)
- ・自然とのつながりが強い

の利点を挙げられていた。個人的な意見としては、情報量や学習機会においては都市部の方が断然に有利であると考えるので、都市部・農村部の教員が情報交換し合えるような場の提供(Teacher's workshopなど)は効果的ではないだろうか。

の教員の社会的地位についても地方との差は否めないようである。地方では、現金収入を得る職業自体が少ないため(村長・地区長・教員に限られる)教員を敬うような環境が整っている。反対に都市部においては、公務員の数も多く、その他の職業も多いので、教員だからという理由で敬われることはない。そして、教員の収入の低さから、副業を持たないと生きていくことができず、その副業がしっかりしていればしているほど、どちらが本業であるか分からない状況も起こってきている。しかし、言い換えれば副業がしっかりしているからこそ、教員も出来るのであり、本業としての教員だけでは、生活が成り立たないとも言える。

#### MoEYS (加藤 栄さんへのインタビュー)

EMさんのインタビュー後、加藤栄さんともお話する機会をいただいた。

今後のカンボジアの教育について(教員の社会的地位)

教育加熱について

#### Non-formal Education

この3つのことについて大変興味深く伺った。まず については、今後5-10年後カンボジアの教育はどのように変化していくかどうかである。結論としては教員の地位は短期間

では何も変化はないだろうとのことであった。理由としては、男性は収入面の不安からも教員になりたがる人が少ないということ。そして女性については、女性の就ける職業自体が限られていることもあり、「教員にでもなっておきなさい」というのが現実であろうとのことだった。そして午前・午後と分かれていることもあり、残りの時間を家事のために充てることができるのも理由ではないだろうか。ここでも大きな問題であるのは、報酬が社会的地位を確立している点である。社会的地位・報酬によって自分の職に対するプライドを左右しているとしたら、やはり職業に見合ったそれらが必要であり、社会環境面での改善も必要である。

つ目の教育熱については、今現在も加熱は充分に進んでおり、それによる格差も拡大しているとのことであった。地方の裕福層においては、中学を卒業すると高校はプノンペンを受験させる。男子の場合、お寺や親戚で世話をしてもらいながらの通学である。その後、高校卒業の試験で大学が決まるので、不正な賄賂が横行する。大学進学においても、プノンペンが有利であり、中には MA や PhD を海外でとるケースもあるとのことであった。つまり、裕福層が先進諸国に劣らない教育を受ける一方、スラムでは、字の書けない読めない子供が増え、女子の教育も二の次になっている状態が腹立たしい。例えば、努力した人間が報われる教育。これは勉学に励もうとする人たちを勇気づけ、希望を見出すことができるだろう。しかし、不正で手に入れた教育は一瞬で消え去り、あとに何も残らない。教育を受ければいいわけではない。これはカンボジアだけでなく、日本にもあてはまることであろう。

最後に つ目の Non-formal Education は、識字率についてである。フォーマルでない教育とはつまり何を指すのか？それが識字率の向上と、夜学であった。もちろん、その他に孤児院や刑務所での教育も当てはまるのであろう。カンボジアの教育で、もっとも理にかなう点であった。例えば、識字率を NGO 団体の教室、もしくは夜学で勉強する。そしてそれが認められると、自分のレベルにあった学年へ編入できるということであった。勉強する上で重要なのは、明確な目標を立てること。そして勉学が長続きし、努力できるのは、やはりそれに見合った報奨あってこそではないだろうか。その点においても編入できる制度というのはすばらしい点である。

## FIDR

FIDR の現在のプロジェクトは、学校建設に赴きをおいているようではあったが、「初等教育支援プロジェクト概要：学校の先生たちが、変わった」の概要をお伺いすることができた。この初等教育支援の掲げる目標としては、

- ・連携システムの強化（教育研修がうまく作動するように）
- ・学習活動の質の向上（先生の意識向上）
- ・学習環境の改善（校舎・トイレ・井戸などのインフラ環境整備）

を挙げている。カンボジアでは、Core と Satellite を中心に教育システムが位置づけられて

いるが、郡教育局・国レベルではほとんど機能しておらず、そのためにも教育機関あるいは学校教育の質の向上が叫ばれているようである。そのため FIDR では特に、初等教育と教員の質の向上を講義・ワークショップを通し図っていた。このようなことから分かるように、教育の原点は常に生徒と教師であり、それらがきちんと機能しないことには郡レベル、国家レベルでの教育システム強化はありえないだろう。そうであるからこそ、モデル校を作り、増やすことで対象になった学校だけではない周辺の活性化にもつながる。これらの確固たる強化を土台にし、その他の学校教育拡大（Non-formal Education、学校内での図書館活動、課外活動）につながるのではないだろうか。

### Room to Read

ブノンペンにある Room to Read を訪問し、Education for girl (scholarship program) についてお話を伺った。インタビューに答えてくれた彼女自身も Room to Read の奨学金制度を受け、大学を卒業し現在職員として働いている。私と同じ年ということもあり、大変話が弾んだ。

現在の活動内容としては、コンポンチャムとシェムリアップの Grade7-9 の女子生徒のみに奨学金補助をしている。一校あたり約 15 人で、インタビューなどによって選考される。主に支給される内容としては、

- 自転車
- 制服
- ノート（一年で 36 冊）
- ペン（18 本）
- 数学科での必要な道具（コンパスなど）
- 授業料
- リュックサック型鞆
- 病院費
- その他

となっている。その他通学距離によっては、交通費の支給、Grade9 の生徒においては食費の支給もある。そして、月に一度ミーティングが行われ、小旅行としてブノンペンの Room to Read の事務所を訪れたり、観光地を周ったりもするということであった。

なぜ女子生徒への奨学金が必要なのであろうか？そこには都市部と農村部での格差が関係しており、第一に、女性は家事をするために家にいた方がいいという考えに基づいた、女性 = 家事労働者という公式が成り立っている。第二に、学校へ行かせないことにより、社会の危険から身を守れるという意見もお聞きした。私には理解しがたい理由ではあるものの、つまりは、傷物にしたくない、箱入り娘でいさせたいとの思いも含まれているものと考えられる。そして第三にして最も驚かざるを得ないのは、高等教育を受けたものは、いい職にありつけないというなんとも反比例した図式ができあがっていることだ。「もう誰

もあなたのように勉強している人なんていないのよ。もう辞めて家にいなさい」そう言われることもあるそうだ。教育に対する意識改革が必要である。

#### スナーダイ・クマエ孤児院

9月6日、シェムリアップにてスナーダイ・クマエ孤児院を訪問させていただいた。孤児院での活動を見学したりするものではなかったが、メアス博子さんのお話には深く考えさせられることが多かった。何もない状態からの手探りでの孤児院設立と運営。現在の成功だけを拝見すると、こんなに若くて小さい女の子の人が切り盛りされているのだ。よほど以前から才能があったのだろうと思ってしまうが、並々でない努力と試行錯誤、めげない忍耐力や深い愛情でここまでやってこられたのだということを感じた。

人の人生を預かる仕事というのは、何の職業にも変えがたい責任を要するものである。それは教員も然りであると思う。つまり自分の一言一句で彼らの人生をプラスにもマイナスにも変えてしまうからである。一方、それに見合うだけの喜びも得ることができるのだろう。メアス博子さんのお話の中で最も興味深かったのが、孤児院内と社会や学校という現実との差であった。孤児院の中では、みんなある程度同じ生活を送っているものの、学校へ行けば自分の持っていないものを持っている同級生に出会い、現実社会を見ることになる。そういう理想と現実の狭間での葛藤は、孤児院の子供たちの方がより多く体験せざるを得ないのかもしれない。それを2人分背負って日々切磋琢磨されているメアス博子さんに会い、当たり前のことを幸せと思えなくなっている自分を改めて感じさせられた一日であった。

#### Room to Read in Siem reap

9月8日シェムリアップにおいて International Literacy day を見学させていただいた。流れとしては、国歌斉唱から始まり、スピーチ、学校での読書向上についてのお話、思い出の読書経験、読み聞かせ、休憩をはさんだのち、グループでの折り紙作業、ロールプレイ、お絵かき、ビンゴゲームなどが主な内容であった。活動内容自体はSVAに酷似しているように感じたが、夏休み中の学校で、子供たち、先生方にお会いでき、教室なども拝見できたのは大変興味深かった。特に子供たちが本の読み聞かせに夢中になっていたり、折り紙で一生懸命お花を作っているところは、国や言葉を超え共通する何かを感じとれたように思う。今回、本の読み聞かせで夢中になっている子供たちを見て思ったのは、いつかカンボジアの子供たちにも活字離れやゲーム漬けになるような日がくるのだろうかと思ったのである。決して自国批判をするつもりはないが、果たして現在の日本の小学校で絵本を読んでどれだけの生徒の心を掴むことができるのだろうか。つまり、どの国にも国なりの教育問題を抱えていて、物質的に満たされることが必ずしも解決には繋がらないと感じた。

#### バンテミンチェイ 図書館活動教育

バンテミンチェイの SVA 図書館活動においては、滞在期間が短かったこともあり、活動内容を見るというよりは、教員養成についての講義を視察させていただいた。講義は、理論と実技に分かれており、場所と教員が移動せず、講師が移動するというものであった。やはりどの教科においても言えることであるが、理論だけでも実施だけでもバランスの取れた講義というものは成り立たない。そして真剣に講義に集中されている教員のみなさんにカンボジア教育の未来を感じた。

KAPE のワークショップも同じであるが、教員が一同に集まり講義を聴く機会というのは、あまり多くないのではないだろうか。それが農村部になると尚更である。単なる情報の提供のみならず、他教員との情報交換、かつ切磋琢磨できる親睦会のような印象を受けた。日本においても同様だろう。いつもは教員として教壇に立っている人たちが、生徒として話を聞いている姿は新鮮であった。

### 3 結果・考察

今回、様々な分野の方々に貴重な時間を割いていただき、教育に関するインタビューをすることができた。

そして教員の社会的地位向上のためには、経済的支持と精神的支持（社会的支持）が必要であると考えます。例えば、教員の給与未払い、もしくは任務に比例していない給与により副業を余儀なくされ、その副業によって、社会からは尊敬の眼差しは向けられなくなる。いわゆる悪循環である。教員という職業を改めて見直す必要がある。

#### 正しい経済的評価をする

プノンペンでの平均的な家族の 1 ヶ月あたりの生活費は、少なくとも 100 米ドルは必要と言われているのに対し、平均的な公務員の 1 ヶ月あたりの給与は、20 米ドルにも満たないこともあり、給与の遅配も多い。このようなことから見ても、教員の給与が任務に対して十分に理解されているとは言いがたく、今後課題として改善されるべき問題である。

#### 社会から尊敬されるような雰囲気作り（都市部）

インタビューを何度かすると、教員に対して尊敬の眼差しを向けている人が少ないように感じた。中には副業に主を置いて教鞭を振るっている教員もいると聞いたので、全てに当てはまるとは言えないが、やはり教員は尊敬されるべき職業であることに変わりはない。そのためにも、教育の重要性・教員の存在意義について幅広く知ってもらう必要があるのではないだろうか。

それをクリアすることにより、教員自体のモチベーションの向上にもつながると思っている。

#### 4 まとめ

他国を学ぶことは、自国を学ぶことである。この一ヶ月プノンペンでのインターンを終え、改めてそう感じた。

私が今回インターンとしてカンボジアを選んだのには様々な理由があるが、その中でも「一ヶ月別の国から日本を見してみる」「NGOの現場を知る」「外国人として暮らす」が大部分を占めていた。私的な理由により、果たして今、自分がこれに参加すべきかと何度も悩んだが、今なら自信を持って来てよかったと言える。本当に充実した一ヶ月であった。

どこの国においても、人との出会いは奇跡であり、自分が望んだからと言って手に入るとは限らない。これこそプライスレスな世界だと思う。

ここに来るまでの私のカンボジアの知識と言うと、おそろしいほどに無知であり、今となっては反省することばかりだが、それと同時に無知であるからこそ、先入観や偏見なく、生のカンボジア文化に触れられたのではないかと思う。

この一ヶ月でカンボジア人から学んだこと。何よりもたくましい。強く優しい。過去を乗り越え、笑顔で生きていくことは並大抵のことではない。私を見ることの出来なかった部分もあるだろう。だがそれを超えるほどの親切さと純粋さを垣間見た気がしたのである。

私は今後この一ヶ月の活動をどのように生かすことができるだろうか？すぐに新しい結果につながる立派な論文が書けるわけではないが、カンボジアのよさ、カンボジアの問題点、文化、言語様々なことに今後も関心を持ち続けることにする。そしてここで出会った全ての人に感謝をし、またどこかでの再会を願い、自分の道を歩むことにする。

#### 5 参考文献

渡辺 有理子 『図書館への道』ビルマ難民キャンプでの1095 ずずき出版 2006年

大菅 俊幸 『泥の菩薩』NGOに生きた仏教者、有馬実成 大法 輪閣 2006年

Nath Bunroeun, *Teacher Training Systems* 2002年